

啓示された言葉

御国の祭壇とその御国

□ 私たちは記憶する限りにおいて自由である □

蛇

御国の兄弟姉妹

二人またはそれ以上が言葉の御名とその御国において集まり、共に記念を始めます。

私は自分のこと、自分の歴史、自分の状況、自分から生まれる真理についてあなたに語るために来たのではない。

私はあなたに、すべてのものがそこから出て、すべてのものが造られた真理について語るために来た。見えないものにおける言葉である。

私は署名もなく、顔もなく、あなたの前に現れる。しかし私はあなたの承認も、拍手も、金銭も求めない。外なるものは何も必要とせず、偽りのものは何も欲しない。言葉の御国には、余るものも欠けるものもない。

ここであなたは読むことも、学ぶことも、蓄えることも、暗記することも、繰り返すこともない。

この場所こそ、書物ではなく、二人またはそれ以上が言葉とその御国の名において集い、共に想起を始める場所である。

私たちが本当は誰であることを思い出すこと。肉より前に、自我より前に、その歴史、その状況、その真理、その利害を持つ役柄より前に、私たちが誰であったかを思い出すこと。

あらゆる形より前に、私たちは誰なのか。

この祭壇は、忘れられた言葉が想起され、その御国が打ち立てられるまで、更新され続けるであろう。

まことにあなたがたに告げる。天の御国のすべてが啓示され、理解され、悟られるであろう。想起され、認識されるために。

ここで啓示されるものは、私の意見でも、私の考えでも、私の信念でもない□ □ □それらはすべて、私ではない役柄から生まれ、ここでは書かない。なぜなら、そうであれば私は偽りをあなたに語ることになり、署名と顔をもって、これは数多ある書物の一つに過ぎなくなってしまうからだ。

ここで啓示されるものは私から生まれるのではない。私はこれらの言葉から来ており、すべてのものはそれらから来る。そしてこのゆえに、私は、私がそこから来てすべてのものがそこから来る真理の著者権（署名と顔）を、所有することも宣言することもできない。なぜなら真理は私だけのものではなく、私はそれから来るからだ。私が想起し認識した言

葉の真理、その名において私は書く。

私の言葉は、御父の剣であり、言葉において鍛えられ、火において握られる。

忘れられたものを思い出すこと

あなたが誰であることを明らかにするために、どこへ向かうのか？外か、内か？

あなたが誰であることを明かすために、教えに頼る必要も、学びに頼る必要も、他の人や他の人の本に答えを求める必要も、大学や宗教に頼る必要もありません。あなたの外に答えを求める必要はなく、外側のものも外部のものも何も必要ありません□□□なぜなら、あなた自身が見つかるために読むべき書物だからです。私たちが誰であることを思い出す唯一の方法は、内なる対話、すなわちあなた自身が内的に（見えないところで）問いかけ、答え、明かしていくことによるのです。

思い出すとき、あなたは知る。

認めるとき、あなたは在る。

兄弟姉妹よ、私たちは内なる父の御国へ帰る途上にあります。忘れ去られた故郷への帰路を思い出しましょう。あなたと私が共に言葉の御名によって集い、その間に御国が現れるでしょう。

私はあなたが既に在るものでないものを教えるつもりはありません。ここでは、忘れ去られたもの、そして私たち全員がそうであるものを思い出しましょう。すなわち、言葉が肉となったことを。

記憶は、形において見えるものを超えた真理を見出す必要性から生じます。実存的問いへの答えを見出す必要性から生じます。この世にこれほど多くの不幸があるのはなぜかを説明する必要性から生じます。それはあなた自身の自我やあなた自身の存在を超えた必要性から生じるのです。

どのようにして、まず人物（肉）を思い出す前に始めるのでしょうか？

あなたの人物、あなたのエゴに仕える心を沈黙させなさい。

人物とエゴとは何でしょうか？

それは、あなたが本当はそうではないのに、常に具現化しているものです：

自分の休息のために眠ること。

自分の健康のために食べること。

自分の体のためにジムに行くこと。

自分のお金のために働くこと。

自分の好みを満たすための娯楽。

□ □ □

これらすべての例において、私たちの心は自分の自我、自分の人物とそのエゴに仕えています。

人物とエゴを具現化することは、自分のために生きることであり、心が専ら自分の自我に仕えている状態です。そしてこの具現化の状態では、あなたの心は沈黙しておらず、あな

たが本当はそうでないものの雑音で満たされています。この状態では、心は人物の肉において生きたことや経験したこと、すなわちあなたの過去、あなたの意見、あなたの信念、あなたの好み、あなたの関心事、あなたの責任、あなたの日常、あなたの恐れとともに、自分自身を思い出し、認識するのです。

では、どのようにして心を沈黙させるのでしょうか？
自分自身を忘れなさい。学んだことすべて、蓄積したものすべて、あなたの過去すべて、あなたの好み、あなたの信念、あなたの意見、あなたの関心事を忘れなさい□□□そしてそれだけではなく、あなたの義務や人物とそのエゴの日常も忘れなさい。「～しなければならない」は、思い出している間は忘れなさい□□□なぜなら、絶対的な沈黙の中では、あなたの心はあなたの人物とそのエゴに仕えておらず、今やあなたの心は、あなただけを包含するのではなく、すべてのものを包含する、はるかに偉大なものに仕えているからです。今やあなたの心は、すべてのものが由来する真理に仕えて沈黙しているのです。

沈黙に入り、自分自身を忘れるとき、あなたの人物とそのエゴの前に何かがあることを思い出し、認めるとき、虚空が現れます。もはや人物とそのエゴの防衛はなく、心の雑音は止まり、心は言葉、すなわちすべてが造られた真理、そしてすべてのものが由来する真理に仕えるようになります。

心を沈黙させることは、心を使わないことを意味しません。心を沈黙させることは、心をあなたの自我、あなたの人物とそのエゴに仕えさせるのをやめることを意味します。心を沈黙させることは、あなたの問題、あなたの仕事、あなたの過去、あなたの未来、あなたから生じるすべてのものについて考えるのをやめることを意味します。心を沈黙させることは、私たちに先立つ真理、見えないところにある言葉の起源に心を仕えさせることを意味します。

虚空、すなわち言葉に仕える心が、私たちが本当は誰であるかを思い出すことができる肥沃な地。なぜなら、もはや私たちは肉における人物とそのエゴ、すなわち本質的に私たちがそうでないものと、自分自身を思い出したり認識したりしないからです。

沈黙によって造られたその虚空の中でこそ、心はあなたの人物とそのエゴに仕えるのをやめ、あなたがそうでないもの（人物とそのエゴ）より以前のものに仕えるようになります。そのとき最初の奇跡が起こるのです□□□臨在が。

臨在が現れます。それは注意ではなく、注意を払うことでもありません。臨在とは意識です。臨在とは、観察者と観察されるものとして、すべてのものを観察することです。臨在とは、一者と全体との意識に住むことです。そしてそれは、あなたの内側で、あなたがそうでない人物とそのエゴを殺し、あなたが由来し、すべてのものが由来する真理、すなわち言葉に心を仕えさせるときにのみ起こるのです。

そして、この具現化された状態、すなわち心が真理と起源に仕えている状態においてこそ、私たちは今や、それを測る尺度も、それを記述するラベルもない宝を、思い出し、明かし、認識する用意ができています。

この状態においてこそ、私たちの思考は私たち自身、私たちから生じるもの、すなわち私

たちの仕事、私たちの人間関係、私たちの雑事に限定されません。むしろこの状態において、私たちの思考は、肉における私たちが何であるか、そして私たち一人ひとりがその中で生きている真理を超えて行くのです。

この状態においてこそ、言葉が内なる対話の中で自らを明かすのです。なぜなら、今や私たちの内なる対話は、私たちの自我（人物とそのエゴ）が中心である問いを発するのではなく、今やその対話は、統一が中心である問いを発するからです。

□ □ □ そしてその中心から、私たちは今や天の御国への帰路を思い出し始め、その御国へのアクセスを与える狭い門を通して入ることができるのです。

ここから先、内なる対話の中で記憶とともに明かされるすべてのものは、それ自体が奇跡です。なぜなら、明かされたすべての真理は神聖だからです。

なぜ御国へのアクセスを与える門は狭い（細い）のでしょうか？
なぜなら、人物やそのエゴとともに入ることはできないからです。天の御国へのアクセスを与える狭い門を通して入るためには、まず自分を空にし、次に記憶と認識をもって自分自身を見出す必要があるからです。

しかし、これに気づきなさい。御国には、あなたがそうでないものを担って入ることはできません。それは気まぐれによるのではなく、対応関係（鍵）によるのです □ □ □ なぜなら、御国に帰るためには、その御国に至る方法を思い出さなければならないからです □ □ □ そして先に明かしたように、私たちの人物とそのエゴに仕える心を持っているなら、帰路の記憶にアクセスすることはできません。なぜなら、私たちの内なる対話において、問いの中心は統一でも、真理でも、言葉でも、起源でも、御国でもなく、むしろ内なる対話における問いの中心は自我、すなわち人物とそのエゴとその状況となるからです □ □ □ そしてそれらの問いとその答えは天の御国へと導かないのです。

では、天の御国に入るために、まずあなたは自分を空にし、次に思い出し（知る）、次に認め（在る）、そして最後に自分自身を見出すのです（私は在る）。

内なる世界と外なる世界

内なる見えざる言葉のうちにありのように、外なる形の見えるものもまたそのとおりである。

□ □ □ 啓示の過程にあります □ □ □